

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03036

研究課題名(和文) 上海地区の新人英語教員に対する研修と成長 - 5年間の縦断的研究

研究課題名(英文) Novice English Teachers' Growth and Teacher Trainig in Shanghai: A Five-Year Longitudinal Study

研究代表者

大賀 まゆみ (OGA, MAyumi)

立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

研究者番号：40737839

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では上海と台湾の3名の小中学校教師を縦断的に追跡し、教室での英語使用の変化とその要因を明らかにした。上海の中学校教師については、2年目は英語の使用比率が上がり、より長い複雑な構文を使っていた一方、語彙レベルには変化がなかった。これは生徒の習熟度にあった英語のインプットを確保しつつも、英語を理解可能にするために発話調整を行ったためだと考えられる。台湾の小学校教師については、ワークショップの参加、教師の信念、授業実践、ネイティブとのチームティンクが要因となり、英語の使用頻度・機能ともに増加していた。また台湾の中学校教師については、シラバスや時間の制約のため、英語の使用頻度が減少していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではレベルの高い英語教育を提供している上海と、日本より早くから小学校英語を導入している台湾において、小中学校英語教師の成長と変化を、教室での英語使用に焦点をあて縦断的に観察・記録し、教師へのインタビューとともに分析した。英語教師が教室内でどのような英語をどのくらい使用しているのかを詳細に報告し、その変化を引き起こす要因の考察を行った。詳細な授業分析とともに教師の成長と変化を縦断的に追跡した研究は数少なく、英語授業における言語使用のガイドライン作成や、新人教員研修の時期や内容について示唆を与えるものと期待できる。

研究成果の概要(英文)：My research longitudinally followed three elementary and junior high school teachers in Shanghai and Taiwan to identify the changes and factors contributing to the development of their English use in the classroom over two years. While the junior high school teacher in Shanghai used more English with longer and more complex structures in the second year than the first year, the level of words remained almost unchanged in the second year. The results suggest that this teacher adjusted his English to accommodate his students' proficiency level and to make his English comprehensible at the same time. The elementary school teacher in Taiwan increased English use and functions of English utterances due to factors such as participation in teacher workshops, teaching experience, team teaching with a native English teacher, and his beliefs about English use. Conversely, the frequency of English used by the junior high school teacher in Taiwan decreased due to time and syllabus constraints.

研究分野：英語教育

キーワード：上海の英語教育 台湾の英語教育 縦断研究 教員研修 授業観察 英語教師の成長 英語教師の言語使用

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

文部科学省はグローバル化に対応した英語教育環境を整えるため、英語教育改革実施計画(2013)*を公表した。それによると、小学校の英語活動はさらに拡充され、中学、高校では基本的に英語で授業を行い、高校では、発表、討論、交渉などの高度な英語活動を行う、となっている。この計画を実現するためには、小中高校の教員の英語力、指導力を強化することが急務の課題であり、教員研修はその中核をなす重要な要素であることは明らかである。

日本人による中国の英語教育についての研究は、中国と日本の英語教育を比較したり、調査内容を記述したりといった形のものが主流となっている。しかし、そのほとんどが、現状報告や現状比較に留まっており、同じ教師を継続的に追い、教員研修を詳細に調査した研究はほとんどない。*文部科学省(2013)。「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国でも群を抜いた英語教育を実現している上海地区の小中学校の英語の授業を継続的に調査・観察し、日本の英語教員研修制度構築にその結果を還元することである。本研究では、これまで断片的にしか情報を得ることができなかった上海の英語教員の研修に焦点を絞り、上海の英語教員の研修の現状、と研修の効果を継続的に調査し、日本の英語教員研修制度に対して提言を行う。

以上が当初の研究の目的であったが、上海のデータは研究主担者と研究分担者が継続的に関わった科学研究(2014-2016年陸)で縦断的に収集した2年分の中学校教師の収集データを譲り受け分析することとした。新たなデータ収集は、上海との比較も視野に入れ、同じ東アジアで、日本より早い時期から小学校英語の導入が進んでいる台湾の小中学校教師各1名計2名を対象に行うこととした。東アジアの2地域で収集した授業動画と教師へのインタビュー、及び教員研修の報告書を分析し、教師の成長とその要因を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 上海: 2014年と2015年に収集した公立中学校教員1名の2年分のデータを以下の方法で分析した。

授業動画: 授業の全ての発話を書き起こし、英語はAS Unitに従い、一発話毎、発話者毎に分け、教師の発話を、主に中国語、中国語+英語、主に英語の3つに分類し、初年度と2年目を比較した。英語の発話は、ドリル、生徒の英語の繰り返し、テキストやPowerPointを読む、意図的発話(教師が外的要因に影響されず意図的に発話した英語)、その他の5つに分類し2年分を比較した。さらに意図的発話の言語的複雑性(単語、句、単文、重文、複文、混文に分類)、一文の平均単語数、語彙レベル(JACET8000を使用)をそれぞれ分析し、2年分を比較した。

インタビュー: 授業後、母語使用、英語の調整、英語使用に対する信念、教員研修についてインタビューを行った。

- (2) 台湾: 高雄市の公立小学校の教師1名、台北市の公立中学校の教師1名の変化を、2019年3月と2020年11月から1月(コロナ禍のため、教師自身に授業を録画してもらいGoogle driveでシェア)の2回に亘り収集したデータを基に以下の方法で分析した。

授業動画: 2年分の動画を研究主担者と分担者でそれぞれ比較し、2人が変化したと感じた点を「変化」とした。上海のデータと同じように、教室内の発話は中国語も含めて全て書き起こし、英語はAS Unitに従い、一発話毎、発話者毎に分け、教師の発話を、主に中国語、中国語+英語、主に英語の3つに分類し、初年度と2年目を比較した。英語の発話は、ドリル、生徒の英語の繰り返し、テキストやPowerPointを読む、意図的発話、その他の5つに分類し2年分を比較した。さらに、意図的発話を8つの機能に分類し、同様に2年分を比較した。

インタビュー: 授業後、母語使用、英語の調整、英語使用に対する信念、教員研修についてインタビューを行った。

研修の報告: 研究期間全体に亘って、Google drive上に受けた研修やサポート、ワークショップへの参加の詳細を随時報告してもらった。

フォローアップインタビュー: 2名の教師に、2年分の授業動画を見てもらい、言語使用と変化した点とその理由についてリフレクションをしてもらい、それに基づきフォローアップインタビューを行った。

4. 研究成果

- (1) 上海

表1は対象クラスと担当教師の情報である。

表 1 対象クラスと担当教師の情報

年度	学年	生徒数	授業時間	授業のトピック	中学校での教授経験
2014	中学1年	21	45 minutes	Relationship-Unit 2 Our animal friends*	3年
2015	中学2年	17	45 minutes	My life-Unit 3 Trouble*	4年

表 2 は教師の使用言語の内訳と発話数である。また表 3 は教師の使用英語の内訳と発話数を示したものである。

表 2 教師の使用言語の内訳と発話数

年度		主に中国語	中国語+英語	主に英語	合計
2014	発話数	115	17	855	987
	(%)	(11.7)	(1.7)	(86.6)	(100.0)
2015	発話数	53	2	734	789
	(%)	(6.7)	(0.3)	(93.0)	(100.0)

表 3 教師の使用英語の内訳と発話数

年度		ドリル	生徒の繰り返し	テキスト/PPT	意図的発話	その他	合計
2014	発話数	94	50	75	627	9	855
	(%)	(11.0)	(5.8)	(8.8)	(73.3)	(1.1)	(100.0)
2015	発話数	18	35	67	613	1	734
	(%)	(2.5)	(4.8)	(9.1)	(83.5)	(0.1)	(100.0)

表 2、表 3 より、2 年目は英語の発話の割合が増え、内訳を見ると、ドリルが減少し、意図的発話の割合が増加していることがわかる。次に意図的発話の言語的複雑性と 1 発話あたりの平均単語数を分析したものを、図 1 と表 4 に示す。

図 1 教師の意図的発話の言語的複雑性：カテゴリと頻度

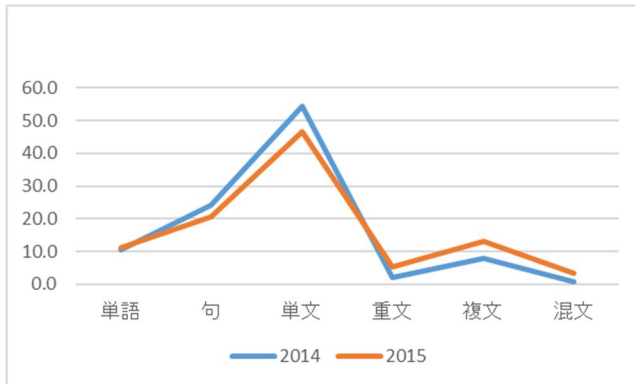


表 4 教師の 1 発話の平均単語数

年度	1 発話の平均単語数
2014	4.47
2015	5.70

図 1 から、2015 年度の方が単文や句の使用が減り、重文・複文・混分の使用頻度が増えていることがわかる。また表 4 からは 2015 年度の方が、発話が長くなっていることがわかる。次に図 2 と図 3 に語彙レベルの分析結果を示す。横軸は語彙レベルをあらわしており、1 から 8 になるに従って、語彙レベルはあがっていく。

図 2 語彙の Token (述べ語数) の比較

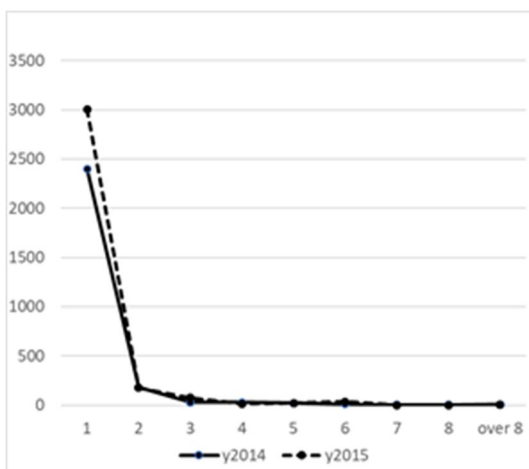


図 3 語彙の types(異なり語数)の比較

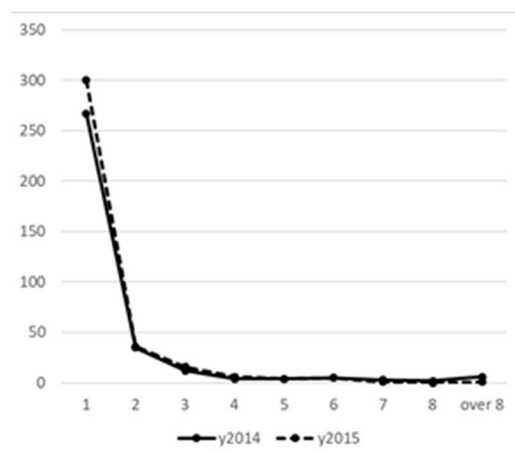


図2、3より、両年ともレベル1(日本の中学生レベル)の使用数が最も多く、2015年の方が token、typesともレベル1の使用頻度がやや高いものの、全体的に大きな違いはなかった。

以上の分析結果より、この中学校教師は習熟度が上がった生徒に対して、2年目は英語の使用割合を増やし、より複雑で長い構文を使う一方、使用する語彙レベルは1年目と比べて変化していなかったことが明らかとなった。インタビューの結果より、より複雑で長い構文を使用することによって習熟度にあったインプットを確保しつつも、生徒が教師の英語を理解できるよう意図的に簡単な単語を使用していたことがわかった。また英語の使用割合の増加は、教師の英語使用に対する信念と授業実践を積んだことも影響していたと考えられる。

(2) 台湾

小学校教師

表5に担当教師と対象クラスの情報を示す。

表5 担当教師と対象クラスの情報

データ収集時期	学年	児童数	授業時間	授業トピック	小学校での教授経験
2019.3	小学5年生	24	40分	What subject do you like?	1年半
2020.12	小学5年生	21	40分	What's wrong? .	3年3ヶ月

表6は教師の使用言語の内訳と発話数である。また表7は教師の使用英語の内訳と発話数を示したものである。

表6 教師の使用言語の内訳と発話数

データ収集時期	主に中国語	主に英語	中国語 + 英語	合計
2019.3	554	236	18	808
(%)	68.6	29.2	2.2	100.0
2020.12	532	241	52	825
(%)	64.5	29.2	6.3	100.0

表7 教師の使用英語の内訳と発話数

データ収集時期	意図的発話	ドリル	教科書 PPT	児童の繰り返し	その他	合計
2019.3	55	81	85	12	3	236
(%)	23.3	34.3	36.0	5.1	1.3	100.0
2020.12	98	106	17	12	8	241
(%)	40.7	44.0	7.1	5.0	3.3	100.0

表6、7より、2年間を比較すると英語の使用量は変化していないが、意図的に発話した英語が増加しているのがわかる。逆に教科書やPowerPointを読んだ英語は激減している。表7の意図的発話を機能別に分類しその使用割合を表したものを図4に示す。

図4 教師の意図的発話の機能別使用割合

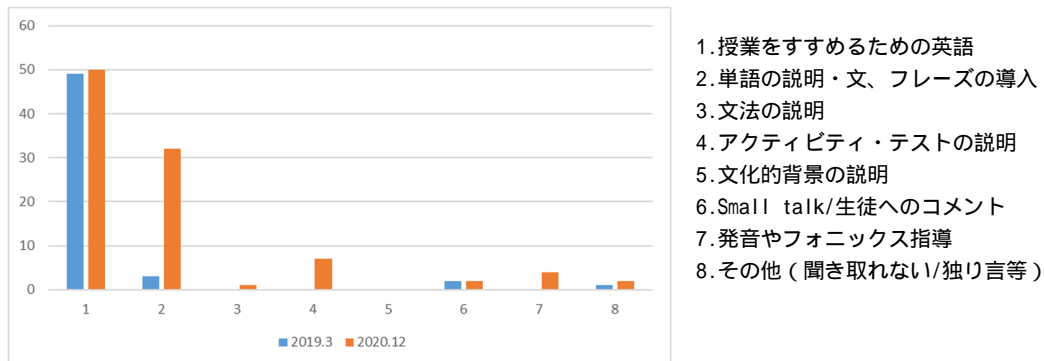


図4から2019年は9割が1. 授業をすすめるための英語であったが、2020年は2.単語の説明・文、フレーズの導入、3.文法の説明、4.アクティビティ・テストの説明、7.発音や

フォニックス指導の4つの機能が aumentandoしていることがわかる。

以上のように、英語（意図的発話）の使用頻度、機能とも増加していた。また授業観察からも、ハキハキゆっくりと話す・授業内容を広げる・雑談や冗談を言う・アクティビティを有効活用している、と言った多面的でポジティブな変化が見られた。この要因として、インタビューと教員研修・ワークショップ参加の報告書より、教員研修・ワークショップの参加・ネイティブとのチームティーチング・教育実践の経験・教師の英語や授業実践についての信念が変化に寄与していることが明らかになった。初年度、教科書に100%沿った訳読方式の授業であったと教師本人がフォローアップインタビューで述べているように、レッスンプランにも変化が見られ、これも英語の使用頻度と機能の増加につながったと考えられる。

中学校教師

表8に担当教師と対象クラスの情報を示す。

表8 担当教師と対象クラスの情報

データ収集時期	学年	生徒数	授業時間	授業トピック	中学校での教授経験
2019.3	中学2年生	23名	45分	比較級	1年半
2021.1	中学2年生	30名	45分	未来形	3年4ヶ月

表9は教師の使用言語の内訳と発話数である。また表10には教師の使用英語の内訳と発話数を示した。

表9 教師の使用言語の内訳と発話数

データ収集時期	主に中国語	主に英語	中国語 + 英語	合計
2019.3	417	132	44	593
(%)	70.3	22.3	7.4	100
2021.1	624	96	44	764
(%)	81.7	12.6	5.8	100

表10 教師の使用英語の内訳と発話数

データ収集時期	意図的発話	ドリル	教科書PPT	生徒の繰り返し	その他	合計
2019.3	23	53	6	40	10	132
(%)	17.4	40.2	4.5	30.3	7.6	100.0
2021.1	8	25	40	22	1	96
(%)	8.3	26.0	41.7	22.9	1.0	100.0

表9、10が示すように、2年目は中国語の発話が増え英語の発話が増え減少しており、意図的発話はわずか8発話で、ほぼ中国語で授業をしていたことがわかる。フォローアップインタビューからは、時間やシラバスの制約からくるプレッシャーが感じられ、それが英語の使用を含む授業のやり方に影響を及ぼしていた。また、英語で授業がやりたいと思っているにも拘わらず、中国語で授業をすることが当たり前になっており、英語使用に関するガイドラインがないことも一因だと考えられる。

(3) まとめ

以上のように3名の教師の言語使用に焦点をあて分析を行い、その成長と要因を明らかにした。台湾の2名の教師については教員研修やワークショップの参加報告書も照らし合わせながら分析を行った。当初4年間の縦断研究で3回のデータ収集を計画していたが、コロナ禍で計画を大幅に変更せざるを得ず、研究期間全体を通して依頼していた教員研修の報告も、2020年3月以降はコロナ禍のため通常通りには行われなかった事が考えられ、特に対面での教員研修は内容が変更されたものと思われる。以上の理由から教員研修の精査については当初の計画通り実施できなかった。本研究のように縦断的に教師の発話を分析した例はほとんどなく、本研究の知見は今後の教員研修や、教室での教師の英語使用のガイドライン作成のヒントになり得ると考える。

上海の収集データは既に論文化しており、今後は上海との比較も視野に入れて、台湾の分析結果を論文化する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 OGA Mayumi	4. 巻 22
2. 論文標題 A Teacher's Language Use in Junior High School English Classrooms in Shanghai - From the Results of a Two-Year Analysis -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JACET Kansai Journal	6. 最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大賀まゆみ・落合淑美	4. 巻 21
2. 論文標題 正課授業でのBeyond Borders Plaza 利用実践の報告：オーディエンスと発表者の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館高等教育研究	6. 最初と最後の頁 261-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00014616	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 落合淑美・大賀まゆみ	4. 巻 23
2. 論文標題 必修授業でのクラス合同発表会イベント実施の試み 発表者は何を学ぶのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学英語教育学会関西支部紀要	6. 最初と最後の頁 177-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 落合淑美・大賀まゆみ	4. 巻 22
2. 論文標題 コロナ禍でのオンライン双方向授業におけるES の学習支援事例報告：必修英語授業プロジェクト発信型英語プログラムにおいて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館高等教育研究	6. 最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00017163	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山下美朋・大賀まゆみ
2. 発表標題 科学英語に特化したライティング支援センター設立とその可能性
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大賀まゆみ
2. 発表標題 上海の中学校の英語授業における教員の言語使用 二年に亘る分析の結果から
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大賀まゆみ・落合淑美
2. 発表標題 正課授業での立命館大学ラーニングコモンズ 利用実践の報告-オーディエンスと発表者の視点から
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 落合淑美・大賀まゆみ
2. 発表標題 クラス合同発表イベントが学生の学習意欲に及ぼす影響
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大賀まゆみ
2. 発表標題 台湾の小学校英語教師の成長
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 坂場大道・山下美朋・大賀まゆみ
2. 発表標題 高大連携による探求型授業の実践報告
3. 学会等名 大学英語教育学会関西支部大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>2018年3月上海師範大学にて参加者及び上海師範大学の先生方をお招きして、成果報告会を開催した。 「An Analysis of L1 and TL Use at a Junior High School in Shanghai」というタイトルで発表し、その後意見交換を行った。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田浦 秀幸 (TAURA Hideyuki) (40313738)	立命館大学・言語教育情報研究科・教授 (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------